



寄贈資料紹介 須恵器壺

—資料の観察からわかること—

上の資料は、今年になって当館へ寄贈されたもので、川越市菅間地内の入間川岸で採集された須恵器の壺です。口縁の一部が欠けている以外はほぼ完形で、とても状態が良い貴重な考古資料といえます。

壺は胴よりも大きく広がる口縁をもつ小型の壺で、丸い胴部の穴に竹の管を差し込み、液体を注ぐために使われたと考えられており、主に古墳へ副葬されました。本資料は高さ 15.4cm、口径 12cmで、沈線が口縁下に一条、頸部に二条巡り、肩部には二条の沈線の間へラで刺突した紋様が施されています。形の特徴から、7世紀前半頃の年代が与えられ、埼玉県内の窯で焼成された製品と考えられます。

本資料で特に注目すべき特徴は、全体的にすりへってつるつるとしている点です。通常、土器は使い続けて表面がすりへることがありますが、本資料は欠けた口縁部の割れ口までがすりへっています。

本資料の採集地付近には縄文時代から古墳時代までの遺物が採集できる入間川西河床遺跡^{いるまがわにしかしやういせき}があり、入間川のやや下流の自然堤防上には、市指定史跡の舟塚古墳^{ふなづかこふん}（市内上老袋^{かみおいぶくろ}）があります。古墳時代の菅間を含めた入間川流域には、幾つもの古墳がありました。本資料の採集地の状態を考慮すると、菅間あるいはその上流にかつてあった古墳が何らかの原因で失われるとともに、そこに副葬されていた壺が欠け、入間川を流されてすりへったところを今日偶然に採集されたと考えられます。

ひとつの資料は作られた後その役目を終え、様々な経緯を経た後、博物館等の展示会ではじめて大勢の目に触れます。その資料がたどったであろう数奇な来歴に思いをめぐらせつつ、詳細な観察によって様々な情報を引き出して紹介することも、博物館に課せられた役割の一つです。 (学芸担当 平野寛之)

「事語継志録」にみる松平信綱（1） — 「智恵伊豆」の実像 —

はじめに

松平伊豆守信綱（慶長元年～寛文2年・1596～1662）は、寛永16年（1639）武蔵国忍おしから川越へ転封し、現在の川越祭りや新河岸川舟運、城下町の町割りや川越城の増築など、川越の基礎を作ったと言っても過言でないほど、大きな足跡を残した人として有名です。彼は「智恵伊豆」との通称で親しまれ、さまざまなエピソードが語られていますが、その実像は断片的で謎に満ちています。

それは、3代将軍家光や4代家綱などから信綱が拝領した書付などをことごとく燃やし、その灰を我が棺の中に納めよと遺言するなど、信綱の気質によるところが大です。しかし、この「事語継志録」という信綱の一代記を読み解くことで、虚説真説ないまぜな彼の足跡が明らかとなります*¹。信綱とはどのような人物であったのか、この資料からその実像に迫りたいと思います。

1 「事語継志録」とは

「事語継志録」は、作者が奥村保之で上下二巻、寛延元年（1748）8月16日の自序があります。その前には、この記録の主人公である信綱の末裔で、三河国吉田藩（現在の豊橋市）藩主松平信復のぶなおの世子信礼せいしによる宝暦9年（1759）11月付けの序が見られます。作者の「奥村」という姓は松平伊豆守家の上級家臣に見られることから、家臣やその関係者である可能性が考えられますが、現在のところはっきりしたことはわかりません。

「事語継志録」は、『国書総目録』では国立公文書館内閣文庫を始め、東京大学図書館や東北大学図書館狩野文庫などで確認できます。しかし、江戸時代によくある木版本として普及していたものでなく、写本で伝えられたものです。当館でも、文政3年（1820）2月に旧松前藩主松前章広より借り受けて写したとされる、松平大和守家旧蔵資料の写本を所蔵しています。また、明治44年（1911）には『続々群書類従』の1冊として活字化されています。

「事語継志録」は信綱が生まれたところから始まり、

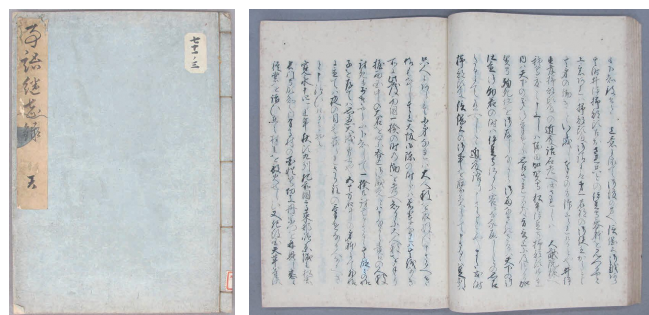


写真1 事語継志録（当館蔵）

彼の死をもって終わります。ただ、記述は年代順に書くような編年体ではなく、場面によって年代が前後しています。それは、エピソードごとに年号が書かれていない事にもよります。この信綱の事績は大野瑞男氏の『松平信綱』の中でも触れられていますが、まさに「智恵伊豆」との別称がふさわしいほど、聡明で軽妙な彼のエピソードがちりばめられた伝記です*²。

2 信綱の生涯

「事語継志録」で彼のエピソードをふりかえる前に、信綱の生涯を簡単に確認しましょう（表1参照）。彼は慶長元年（1596）幕府代官の大河内金兵衛久綱（1570～1646）の長男として武蔵国で誕生しています。

川越鍛冶町名主中島与兵衛孝昌が著した享和元年（1801）成立の「武蔵三芳野名勝図会」では、川越城下の裏宿西側の北に「大河内氏弟蹟」と、江戸時代初期の慶長ころに大河内久綱の屋敷があったと記されており、信綱が川越で生まれた可能性が考えられます*³。ただ、久綱は幕府代官伊奈忠次の家老的立場であったため、川越でなく小室陣屋（現埼玉県伊奈町）にいたとされ、信綱誕生の場所も小室陣屋付近ではないかと、大野瑞男氏は推定しています（註2、6頁）。

慶長6年に、信綱は叔父松平右衛門大夫正綱うすもんたいぶ（1576～1648）の養子となります。松平正綱は、一般的には日光の杉並木を整備した人として著名ですが、幕府勘定頭（のちの勘定奉行）として家康に仕えた側近です。そのような関係で、同9年7月17日に家光が生まれると、同月25日に信綱は家光付きの小姓となります。

その後、寛永9年（1632）正月24日に大御所の秀忠が死去すると、その年の11月18日には、「宿老並」と幕府年寄（のちの老中）と同等の扱いを受け、信綱が幕政上の重要な責務を担うこととなります。その中でも顕著なのは、同14年に始まるいわゆる島原の乱の鎮圧です。戸田左門氏^{うじかね}鏡とともにいわゆる総大将として九州の名だたる諸大名たちを指揮しています。

その後、同16年に川越藩主になり、野火止新田を始めとする耕地の開発や、新河岸川舟運の整備などの領地支配を行います。

家光が死去した慶安4年（1651）、信綱は由井正雪らの起こした慶安事件を解決し、幼君の4代將軍家綱を補佐します。家光が死去した時、老中である下総国^{かがのかみ}佐倉藩主堀田加賀守正盛と岩槻藩主阿部^{つしまのかみ}対馬守重次が殉死しますが、信綱は忍藩主阿部^{ぶんごのかみ}豊後守忠秋とともにあえて殉死を選択することなく、生きて家綱を支えたのでした。

明暦3年（1657）正月のいわゆる明暦の大火では、江戸城本丸や天守閣が焼失する危機的状況への対応やその後の江戸の復興に信綱が大きく関わったとされています。それから5年後の寛文2年（1662）、信綱は67歳の生涯を終えます。

3 「事語継志録」にみる信綱の事績

ここから本論として「事語継志録」に書かれた信綱のエピソードを紹介したいと思います。先ほど彼の生涯を概観しましたが、ここでは①正綱の養子として家光の小姓を勤めた時代、②島原の乱、③領地川越の関連、④家光の死去と殉死、⑤慶安事件や明暦の大火、⑥信綱の死去する前後と、分けて見ていきます。

①正綱の養子・家光の小姓時代

信綱がまだ長四郎と呼ばれていた幼年のころ、叔父の松平正綱の養子になります。長四郎は「某ハ御代官ノ外様モノ、子ニテ口惜クコソアレ、恐ナガラ御苗字ヲ下サレ御養子ニ」なりたいたと正綱に申し出ます。何故本名を捨て私の養子になりたいのかと正綱が問うと、「本名ニシテハ上ノ御近習叶ヒガタシ、御養子ニ成申ホドナラバ、若ヤ御座近ク御奉公モ成ベキヤト」、大河内の名では上様の側に仕えられないが、正綱の養子になればそれが叶うかもしれないと、長四郎こと信綱は述べています。大河内家の家譜などでは、信綱が6歳の慶長6年（1601）に正綱の養子となっていますが、ここでは当時8歳の信綱の話として記されています（註1、116頁）。

また、信綱が10歳前後の家光の小姓時代の話として、江戸城の台所で食事をしているとき、そのとき老中の酒井^{さぬきのかみ}讃岐守忠利や土井^{おおいのかみ}大炊頭利勝ら幕府の要職にある歴々の面前であるにも関わらず、家光から呼ばれると「箸ヲモナゲステ、膳ノ上ヲハネ越走りテ御前へ出玉フ」と、箸を投げ捨て膳の上を飛び跳ねて、信綱は家光の御前へ参上しました。その様子を見た正綱は、無礼千万と涙ながらに信綱に説教します。

信綱は以下のように答えます。「外ヨリハ無礼トモ見^{もうすべく}ヘ可申候ヘドモ、今日ニ限ズ、イツトテモ召セラルハ、時分ハ、他ヒラモ見ラズ、誰ノ側ニ居玉フモ思ヒモ出サレズ、少モ早く罷出度^{たくぞんじたまつる}奉存ノ心バカリニテ、御前ノ儀ヲ一心ニ大切ニ奉存ノ外無他念^{ほかたねんなく}」と、たとえ他人から見て無礼だとしても、家光からのお召しと聞けば、少しでも早く家光のもとへ参上したいという一心の余りとの信綱の返答に、正綱は非常に喜び、必ず上様の御用に叶う者だと感涙しました（註1、118頁）。

表1 松平信綱略年譜

和年号	西暦	年齢	事項
慶長元年	1596	1	代官大河内久綱の長男として10/30誕生。幼名長四郎。
同6年	1601	6	叔父松平正綱の養子になる。
同9年	1604	9	7/17家光誕生。7/25家光の小姓になる。
元和6年	1620	25	1/20采地500石を賜う。この年に信綱と改める。
同9年	1623	28	7月家光の上洛に供奉。従五位下伊豆守に叙任。
寛永9年	1632	37	11/18年寄（老中）並の扱いに。
同10年	1633	38	5/5堀田正盛・阿部忠秋とともに信綱老中に就任し、忍3万石を賜う。
同14年	1637	42	11/27島原の乱の討伐の命を受ける。
同15年	1638	43	1/2肥前国に到着。2/28原城落城。11/7阿部重次が老中に。
同16年	1639	44	1/5武蔵国川越6万石へ転封。
正保4年	1647	52	7/5常陸国府中・武蔵国騎西領で15000石加増。
慶安元年	1648	53	6/22養父正綱死去。川越領で検地を行う。
同4年	1651	56	4/20家光の死去。堀田正盛・阿部重次ら殉死。7月慶安事件の解決に尽力。
承応2年	1653	58	8月野火止新田の開発。
寛文2年	1662	67	3/16死去。岩槻平林寺に埋葬。

註：大野瑞男氏『松平信綱』所収の略年譜より作成。

②島原の乱

九州の肥前国島原や肥後国天草の百姓たちがこもる原城付近に信綱が到着したのは、寛永15年（1638）正月のことでした。当時忍藩3万石の藩主として1300～1500人の軍勢を引き連れてきました。

出兵した九州の諸大名へ、「永々在陣迷惑タルベシト思召ル、旨上意ノ由ニテ、諸軍勢へ扶持方下サル、都合拾万六千人余」と、将軍の上意にて兵糧米を下付しました。しかし、この上意は江戸から命じられたものではなく信綱の独断でした。信綱は長引く在陣の倦怠感を見抜き、上意を得る返信を待たずして処置しました。期せずして江戸から信綱のもとへ上意が下り、一方では信綱が上申した手紙が行き違いで家光のもとに届きました。その内容に家光は「御心ノゴトクナル仕ヤウトテ殊ニ御感不斜シトナリ」と、自分と同じ考えの信綱を賞賛しました（註1、139頁）。

「寛政重修諸家譜」によれば、そもそも島原へ出発する前から家光より白紙の御朱印状（家光の朱印が押された白紙）が信綱へ数通下付されていたようです。つまり、いつでも信綱の指示を上意として命令することが、あらかじめ認められていたこととなります*4。

また、当初は同年2月28日からの予定が、抜け駆け者が出て前日からの原城の総攻撃となったとき、中には「若又若キ者モ先へ不参者共、苦ニ存ズル事モアルベケレドモ、敵出ナバ御側ニ在ル者共コソ御用ニ立ベケレ、先へ参ラサルハ是御奉公」と、戦場へはやる若者へ、側にいることも奉公だと信綱は説得し安堵させました。「名将ノ御意ノホド皆感ジ合ルト」と、信綱の名将ぶりを賛嘆しています（註1、141頁）。

③領地川越との関連

島原の乱ののち、寛永16年には3万石の加増を得て川越に転封します。「事語継志録」には、老中として江戸での活躍を記した話が非常に多く、一方で領地のある川越に関わる話は残念ながらわずかではありますが、見ていきましょう。

出羽国米沢藩主の上杉家が江戸城の普請をしている時に、領地からの人足が足りず工事が進まないのので、「領分河越ホド近クアレバ、御用ニアラバ四五千モ其上モ人足ヤトハカシ」と、信綱が上杉家の家老へ川越から人足を4,5千人ほど手配しようかと提案しました。家老たちは無理だと踏んで「サアラバ今日ニモ人

足遣シ申スベキ」と打ち笑っていたところ、常々領地へ申付けているので希望の人数を述べよと信綱は笑って答えました。真偽のほどは定かではないですが、日頃から信綱が川越藩に対して領地を良く治めたようすがうかがえます（註1、126頁）。

また藩領の百姓へ、蓬莱の島にある鬼の宝物で、隠蓑・隠笠・打出の小槌を知っているかと信綱が問います。この真意は、雨が降って諸人が農作業できないときに蓑や笠をかぶって鍬（小槌）で田畑を耕せば、「如此人ニ隠レ忍ビテカセギタレバ富貴トナル」と、耕作に精を出すよう諭すものでした（註1、170頁）。この話は、川越本町名主榎本弥左衛門忠重の記録にも記されています*5。この記録には、信綱が川越藩領民へ申付けた話が多く収められていますが、「事語継志録」に掲載された話はこれのみなので、作者の奥村保之はこの覚書を未見だったことがうかがえます。

ただ、「事語継志録」が書かれた当時の川越藩主秋元但馬守の話として、「河越ハ御旧領ユヘ、今以テ其百姓町人マデ古老ハ信綱公ノ御徳恵ノ残アル事ヲ申出テ猶慕ヒ奉ルトカヤ」とあり、今でも信綱公の遺徳を偲ぶものが多いとも記しています（註1、186頁）。

信綱がどの程度、領地である川越にいたのかは明らかではありません。先述の「寛政重修諸家譜」によれば、川越藩主となって直近の寛永16年（1639）4月23日に暇を得て川越に赴いたことが記されています。また、正保3年（1646）4月3日に、実父の大河内久綱が死去し喪に服するため川越へ来ています。また、慶安元年（1648）6月22日には、養父の松平正綱の死去のため、喪中の暇を得て川越へ来ています。いずれも、家光の意向をうけて、喪中であるにも関わらず、程なく江戸城への帰還が命ぜられており、信綱が幕政に不可欠な存在だったこともうかがえます。

④家光の死去と近臣の殉死

信綱にまつわる事柄のうち、家光から多くの寵愛を受けたにもかかわらず、何故信綱は家光の死後に殉死しなかったのか、最も気になるところではないでしょうか。同じ六人衆のうち、老中の堀田正盛と阿部重次は殉死したにもかかわらず、松平信綱と阿部忠秋は死後も幕政に重きをなしましたが、特に信綱に対して世間の目は厳しかったようです。

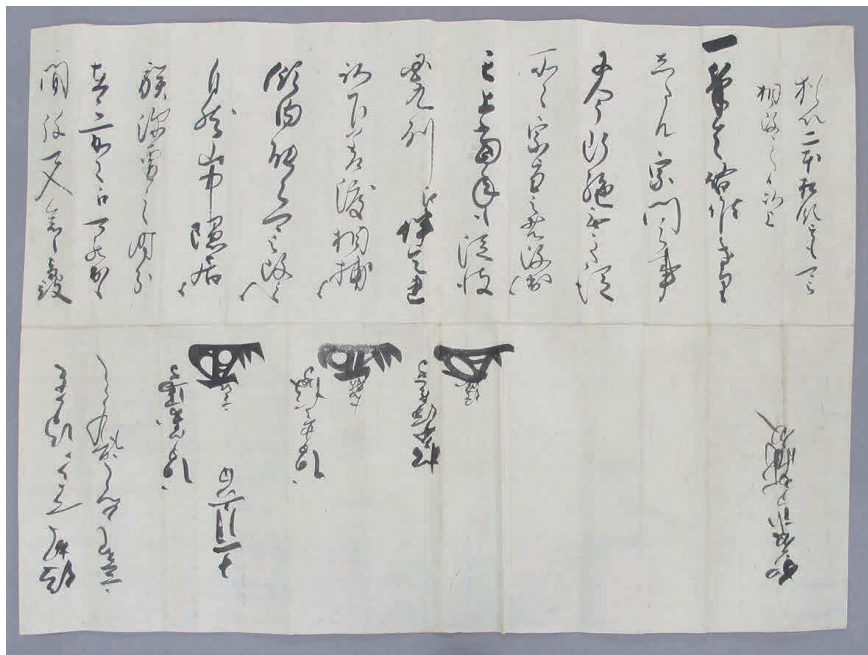


写真2 寛永18～19(1641～2)江戸幕府老中連署奉書(個人蔵)
幕府老中阿部対馬守重次・阿部豊後守忠秋・松平伊豆守信綱が連署している。

たとえば、「信綱公ハ人々モ知リタル程ノ御恩ヲ得玉フユヘ、必定御殉死アラント世間ノ人モ推量シ沙汰シケレドモ、サナキハ深キ思召アルユヘナリ、是ヲバ知ラデ、ソノ事ヲ色々誹テ落書或ハ童謡シケル」と、世間の落書やはては童謡に歌われているのに、少しも意に介さず、「深キ思召」と家光の意向を貫く信綱の姿が描かれています(註1、182頁)。

また、近江国彦根藩主井伊掃部頭直孝の話として、堀田正盛と信綱と直孝がいれば、天下のことは気遣い無用だと、かねがね家光に話してきた。「加賀守殉死仕ルヲ御存ジナガラ、御留ナサレザルハ」と、堀田正盛は殉死するに違いないと、生前から家光は気づいていたのに、それを止めなかったのは何故か。それは、「天下ノ御仕置、御幼君ノ時ハ伊豆守仕ルニ害ニ成ベシト思召タルニテアルベシ」、幼少の家綱を信綱が補佐する時に、堀田の存在がかえって害になると家光が考えていたからだとして記しています(註1、137頁)。

また、信綱と同様に幕府大老だった若狭国小浜藩主酒井讃岐守忠勝へも批判が集中しましたが、忠勝も信綱と同様に意にも介さなかったようです。

続いて、「忠臣ノ二君ニ仕ヘズト云ハ他姓ノ事ゾ、先君ノ御恩ヲ蒙ラヌ臣ヤアルベキ、皆々御先代ノ御恩深ク御取立ノ者ナリトテ、一分ノ名ヲ以テ悉ク御供申サバ、幼君ヲバ誰カ守護申ベキヤ」と、二君に仕えずを忠臣というのは、同じ姓の徳川に仕え続けるものには当たらず、一時の名分で皆が殉死するならば、誰が

幼い家綱を支えるのかと擁護していません(註1、150頁)。松平信礼の序文にも、「先世忠臣若死、誰受襁褓之託、以擁幼君乎」とあり、もし家光時代の忠臣が死ぬのならば、誰が幼君を支えるのかと述べる言葉とも符合します(註1、113頁)。

また、殉死した阿部重次の話として、家光が鷹狩りに出る前に、江戸城二ノ丸の庭にある数百の石を、帰ってくる迄に全て堀の外に出すよう重次に命じます。全ての石を出すのに、堀や橋・石垣も壊さなければできないと奉行に言われて、途方に暮れた重次の前に、城を出る信綱に出くわし、信綱から大石の際を深く掘って石を埋めるという方策を得ます。夜になり鷹狩りから

戻った家光が庭の様子を見て、重次へ「是伊豆守ニ頼ミタル物ニテヤト」と、信綱の指示によるものと家光は見抜き冷笑しました(註1、124頁)。

また、家光が船をおりる時、家光の足が濡れていたもので、重次が自分の羽織でその足を拭こうと思ったときには、既に信綱が家光の側で足を拭いていました。「カヤウニヨキ所ヘ心付テモ、伊豆殿ヨリ遅クナル」と、信綱の行動のすばやさや重次が賞賛しています(註1、134頁)。それは、同じ老中の忍藩主阿部豊後守忠秋も、「毎度伊豆殿仰セラル、事ハヤシ、自分ナドハ後申ナリ」として、自分が妙案を考えている間に、信綱はすでに決断していると述べています(註1、146頁)。

このように「事語継志録」では、老中の中でも抜きんできた存在として信綱が描かれており、殉死できなかった理由が暗示されています。しかし、何故彼が殉死しなかったのか。それは歴史の闇に閉ざされたままです。もしかしたら、彼の死の直前に燃やされた書付のなかに、その理由がわかるものがあったかもしれません。*以下次号に続く

(学芸担当 宮原一郎)

註：*1「事語継志録」は『続々群書類従 第三史伝部』(国書刊行会、1911年)で活字化されています。

*2『松平信綱』(吉川弘文館、2010年)。

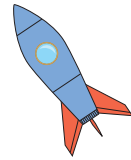
*3『校注武蔵三芳野名勝図会』(川越市立中央図書館、1994年)62頁。

*4『寛政重修諸家譜』(続群書類従刊行会)第4巻、402頁。

*5『榎本弥左衛門覚書』(平凡社、2001年)199頁。



探検！！となりのまちの博物館



今年は、例年に増して夏の暑さが厳しい年でした。熊谷では気温が41.1度に達し、国内最高記録を樹立したのが記憶に新しいことと思います。

博物館にとって夏と言えば、夏休み特別企画の「探検！！となりのまちの博物館」が挙げられます。マイクバスに乗って、近隣の博物館等に行ってみるという、社会科見学のようなイベントで、毎年好評をいただいている人気企画になります。

今号ではこの「探検！！となりのまちの博物館」についてご紹介いたします。

始まりは・・・

この企画が始まったのは平成22年のことです。今年で9回目になります。見学先は埼玉県内の博物館や類似した施設になります。夏休み期間中の子どもたちに、博物館等で楽しく体験できる場を提供し、歴史や文化、公共施設に対する理解や関心を深めてほしいという思いで、この企画が始まりました。埼玉県には、博物館や類似した施設が78館園（埼玉県博物館連絡協議会に加盟）もあります。これを機会に、埼玉県の博物館に興味をもってほしいという思いもあります。

今年の見学先は「埼玉県平和資料館（ピース・ミュージアム）」と「JAXA 地球観測センター」です。本館の夏の収蔵品展「戦中・戦後の川越の歩み」に合わせ、平和が当たり前になった今だからこそ、改めて戦争の怖さ、平和の尊さについて考えてもらいたいという思いから設定しました。

それでは、今年の様子を見ていきましょう。

8月1日（水） 天気は快晴！

朝から太陽がさんさんと輝く中、今年度の「探検！！となりのまちの博物館」がスタートしました。今回参加していただいたのは、18組40名の皆さん。親子の方がほとんどですが、勉強のためにお友達同士で参加してくれた小学生もいました。

最初の目的地は東松山市にある埼玉県平和資料館です。今回参加してくれた子ども達のほとんどが小学生。しかも5年生以下の子ばかりです。つまり、まだ歴史、戦争の授業を受けていないのです。国語科の教材で多少は戦時中の生活に触れているものの、詳しくは勉強

をしていません。そのような子ども達に、果たして今回の意義が伝わるかどうか、一抹の不安を抱きつつ見学が始まりました。

まずは、職員の方が太平洋戦争の概要や出征する兵士の姿、戦時下の暮らしについて、写真や実物を見せながら説明をしてくださいました。子ども達がどのような思いで聞いているのだろうと、ふと顔を見てみると、びっくりしました。目を見開き、画面に吸い込まれるように聞いているのです。写真が変わる度に驚きの表情に変わったり、メモをとる手がとまったり・・・。先ほどの不安が一気に吹き飛んでしまいました。説明の後には実物を触らせていただきました。焼夷弾しょういだんを手にとったときは、その重さから戦争の悲惨さが体の中に入り込んでくるようでした。



写真1 戦時中の道具に触れる子ども達

続いて館内の見学です。平和資料館では戦時中の教室が再現されており、そこで空襲警報ぼうくうごうと防空壕への避難を体験できます。子ども達は初めて入る防空壕に最初は好奇心のようなものを抱いていたものの、いざ中に入ると防空壕の暗さや狭さ、そして本物さながらの飛行機の爆音や振動に、恐怖を感じているようでした。また館内には、たくさんの戦争に関する資料が展示されており、自由に見学しました。印象的な光景が、保護者の方が展示物を指差しながら一生懸命にお子さんに説明している姿です。その姿に、戦争の怖さ、平和



写真2 防空壕体験

の尊さが親から子に継承されていくのを感じました。

お昼ご飯の後に向かったのが、鳩山町にある JAXA 地球観測センターです。こちらには、巨大なパラボラアンテナがあり、地球観測のための衛星から送られてくるデータを電波で受信しています。運が良ければパラボラアンテナが動いているのが見られるのですが、この日は残念ながら見ることはできませんでした。

はじめに職員の方から施設の概要を説明していただき、その後2カ所を見学しました。1つめの地球観測展示室では、地球観測衛星の模型、リモートセンシングという観測のしくみがわかる映像や模型などがあり、宇宙科学技術の凄さに驚かされるばかりでした。

2つめの第一運用棟は、予約しないと見学することができない施設です。実際にこの運用棟で衛星から送られてくるデータを受信・処理しており、その設備を間近に見ることができました。また、陸域観測技術衛星「だいち」から受信したデータから作られた都市の写真があり、3Dめがねをかけて見ると写真の中のもの

のが目の前に飛び出してきました。特に富士山の写真に子ども達は興味を示していて、「すごい！すごい！」と大声をあげて喜んでいました。リモートセンシングによって世界を正確に再現することができるようになったのだと感心しました。



写真3 3Dめがねで衛星からの地形データを確認

以上で見学は終了です。帰りの車内は、子ども達が家の方やお友達に嬉しそうに、時には真剣に思い出を語る声であふれていました。見学は大成功です！

「探検！！となりのまちの博物館」は来年度も再来年度も続いていきます。そのときの時代のニーズをとらえ、「行ってよかった！」「来年も行きたいな」と思えるようなものを提供し続けていきたいと思えます。

(教育普及担当 伊藤直仁)

Information

平成30年度の博物館行事です(3月まで)

展覧会・講座・教室 etc

●…一般向け事業 開催日・講座名
○…子ども向け事業 内容・申込開始日

1月	<p>19日(土)～ 第29回 むかしの勉強・むかしの遊び展</p> <p>○12日(土) 子ども体験教室 まゆ玉飾りを作ろう</p> <p>●26日(土) 大人体験教室 土偶作り教室</p>
2月	<p>第29回 むかしの勉強・むかしの遊び展</p> <p>○2日(土) 子ども体験教室 はにわクッキーを作ろう</p> <p>●11日(月・祝) 野外博物館教室 弓取式と甘酒祭りを訪ねて</p> <p>○16日(土)/23日(土) 子ども体験教室 むかしの道具を使ってみよう</p> <p>10日(日) むかし展関連事業 なつかしい昭和の自動車</p> <p>●17日(日) 博物館歴史講座 川越の近代①</p> <p>●24日(日) 博物館歴史講座 川越の近代②</p>
3月	<p>～3日(日)</p> <p>●3日(日) 博物館歴史講座 川越の近代③</p> <p>16日(土)～5月12日(日) 第46回企画展 古墳の終焉と山王塚古墳(仮題)</p> <p>●17日(日) 館長講座 第四回</p> <p>●24日(日) 博物館歴史講座 山王塚古墳-上円下方墳の謎に迫る-</p> <p>○9日(土) 子ども体験教室 和紙作りに挑戦</p> <p>○16日(土) 子ども体験教室 わら細工に挑戦</p>

第29回「むかしの勉強・むかしの遊び」展

会期 平成31年1月19日(土)～3月3日(日)

平成最後の「むかしの勉強・むかしの遊び」展は、今年度で第29回となりました。毎年、昭和30～40年代を中心とした教室・居間・台所や駄菓子屋の店先を再現しています。地域の人々の暮らしがどのように変化したか、昭和時代をよく知る方だけでなく平成世代の方にも楽しんでいただけたと思います。

今回は、昨年同様「触れる展示」として、教科書や漫画、生活用品などを入り口付近に配置しました。

ぜひご家族で来館していただき、みなさんで会話をしながらご覧ください。

祝 入館者350万人達成!

11月15日、博物館入館者数が平成2年3月1日の開館以来、延べ350万人に到達しました。記念すべき入館者となったのは、市内在住の池水さんご夫婦です。

当日は新保教育長から入館者証と記念品が贈呈されました。



入館者証と記念品を贈呈

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧)券		
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●美術館 ●まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	休館中	300円	370円	600円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	休館中	150円	180円	400円

※()内料金は、団体(20名以上、1名につき)の場合

◆交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より、

●東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩10分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車すぐ

●イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車すぐ

※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)

第4金曜日(休日を除く)年末年始(12月29日～1月3日)

館内消毒(6月下旬)特別整理期間(12月下旬)

*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿とも原則として同じ(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館)

*蔵造り資料館は、耐震化事業のため平成29年7月1日から平成31年3月末(予定)まで休館いたします。

◆ガイド ○博物館 平日(開館日)午前11時・午後2時 土・日・祝日 午前11時・午後1時・午後2時・午後3時

※予定を変更させていただく場合もありますので、ガイドを御希望の方は、博物館までお問い合わせください。

○川越城本丸御殿 毎月第2・第3日曜日 午前11時・午後2時 ※事前のお申し込みはいりません。当日直接おこしください。

◆機織り実演・体験(協力:博物館同好会)

○博物館 毎週火・水曜日 午後1時～3時 華の会(裂き織り)

毎週木・日曜日 午前10時～午後3時(12時～1時はお休み) 川越唐棧手織りの会

※予定を変更させていただく場合もありますので、御希望の方は博物館までお問い合わせください。



平成31年 1月							2月							3月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
			①	②	③	4						1	2						1	2
6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9	3	4	5	6	7	8	9
13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16	10	11	12	13	14	15	16
20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23	17	18	19	20	21	22	23
27	28	29	30	31			24	25	26	27	28			24	25	26	27	28	29	30
													31							

○印は、2館休館(博物館、本丸御殿)

博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のQRコードから登録の手続きができます。毎月25日に最新の情報を配信します。

※登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信等にかかる費用は利用者の負担となります。



発行日◆平成30年12月12日 発行◆川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1

TEL 049-222-5399

FAX 049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

ホームページ <http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/>